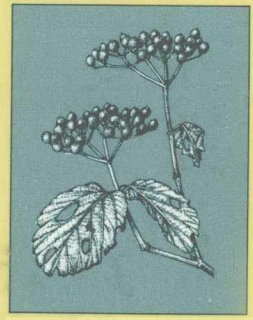
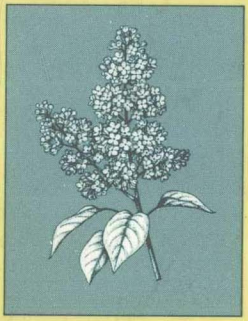
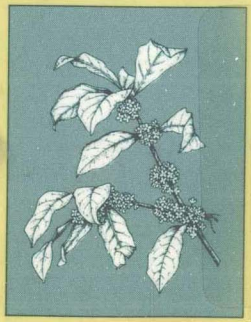
花々の染め帳







足田 輝一 著

東海大学出版会

花々の染め帳

江苏工业学院图书馆
藏书章

足田 輝一 著

東海大学出版会

足田輝一（あしだ　てるかず）
1918年、兵庫県生まれ。北海道大学理学部動物学科を卒業。朝日新聞社に入社。『週刊朝日』『科学朝日』の各編集長および出版局長を歴任。1973年定年退職後は、ナチュラリストとして活躍。

主な著書
『雑木林の博物誌』（新潮社）『雑木林の四季』（平凡社）『カラー武蔵野の魅力』（淡交社）『自然有情』（草思社）『樹』（講談社）『樹の文化誌』（朝日新聞社）『雑木林通信』（文芸春秋社）『草木夜ばなし・今や昔』（草思社）など。

花々の染め帳

1990年5月31日　初版第1刷発行

著　者　足田輝一

発行者　山田　渉

発行所　東海大学出版会
東京都新宿区新宿3-27-4　東海ビル　〒160
電話　03（356）1541　振替東京0-46614

印刷所／港北出版印刷　製本所／石津製本所

目次

花々の染め帳

ムラサキは万葉に匂う　3
サフランと平賀源内　7
シルクロードから来たベニバナ　11
ハマナスにしのぶアイヌの姿　15
夕焼け空はアカネ色　19
ツユクサははかない青　23
カリヤスと黄八丈　27
ヤマアイを使った大嘗祭　31
貝紫の帆とクレオパトラ　35
ライスカレーはウコン色　39
ツルバミ色はドングリから　43
アイが染めた江戸の町　47

匂いの草木誌

ヘリオトロープは明治から　53
ジンコウの匂った江戸　57
札幌にゆかりのライラック　61
クスノキの若葉の香り　65
水車のつくったスギ線香　69
バラ香水のはじめ　73
モクセイは佳人の面影　77
ユズにひそんだ日本の味　81
ニオイスミレの咲く頃　85
コショウは海のシルクロードから　89
文明開化で知ったパセリ　93
ゲッケイジュとローマ皇帝　97

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

雑木林のダイアリー

フジ・山野を飾る花房　103
エゴノキの手まり唄　107
ヤマボウシ・群蝶の舞　111
クヌギがみた時代　115
クズの原に風がたつ　119
ガマズミの赤い珠　123
イタヤカエデの秋　127
遠い日のホオノキ　131
ヒサカキと紫染め　135
クロモジの爪楊子　139
早春のウグイスカグラ　143
ヤマザクラのふるさと　147

毒の咲く花園

チョウセンアサガオと華岡青洲　153
タイマで幻を見た　157
毒殺に使われたドクニンジン　161
コカから生れたコカ・コーラ　165
ヒガンバナはみのらない　169
トリカブトとアイヌの毒矢　173
尼さんも踊るワライタケ　177
血ぬられたベラドンナ　181
ケシの実からアヘン　185
バッカクのつくる幻覚　189
怪奇な花のマムシグサ　193
タバコという悪魔　197
あとがき

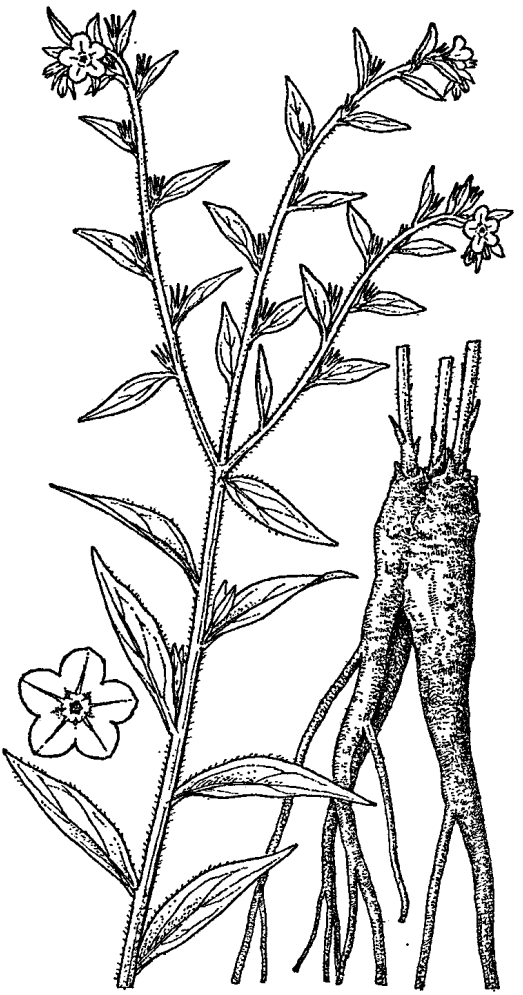
カット・装丁　三島三治

中扉のカットは『本草綱目』（中国明代）より

花々の染め帳

紫草

ムラサキは万葉に匂う



東京の井の頭公園の池に、弁天さまの社がある。『江戸名所図会』によると、建久八年（一一九七）に源頼朝が創建したという。この弁天宮への参道のわき、小高い岡の上に大きい一対の石灯籠が立っている。人々はこれを〝紫灯籠〟とよんでいる。

台座にきざまれた文字を読むと、江戸の紫根問屋、紫染屋など七十九名、紫染職人十四名が寄進している。井の頭に発する神田上水で紫染めを業としていた人たちが、慶応元年（一八六五）にゆかりの地に建てたもの。

宝永（一七〇四～一一）のころ、井の頭にも近い松庵新川の百姓、杉田仙蔵が京染めの紫の美しさを再現したいと思い、苦心を重ね、ムラサキの産地だった奥州の南部まで出かけて、栽培法を習い、井の頭の水でみごとな紫に染めあげるのに成功した。これが、江戸紫の由来だといわれる。

この紫染めには、媒染剤として武蔵野に多いヒサカキの木灰が使われた。紫灯籠にも武州五日市戸倉の灰屋清左衛門の名があるが、ヒサカキの灰をつくっていた業者だ。

紫のひともとゆゑに武蔵野の
草はみながらあはれとぞみる

『古今集』にも歌われているように、ムラサキという草は、武蔵野のシンボルであった。

そして、江戸文化のなかでは、江戸紫は町人の粋のしるしであった。江戸歌舞伎の助六の、鉢巻の色が代表している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ムラサキを使って、紫染めをするのは、おそらく飛鳥時代に中国大陸から伝来した技術であろう。それまでの日本では、赤土をすりつけたり、ツユクサの花をこするなど、単純な着色法しか知らなかったが、媒染剤などを使うという新しい安定した染色法が入ってきた。

『万葉集』にも、こうした新しい色染めの技術が歌われている。

紫は灰さすものぞ海石榴市の
八十の衢に逢ひし兒や誰

大和の海石榴市という地名は、おそらくツバキの花を持った巫女が立ったり、ツバキが売られていた市場であったろう。その地名を飾る言葉に、紫染めには灰をさすのだ、と歌いこんでいる。そのころ大和地方でムラサキで染める時には、ツバキの木灰を用いたことがわかる。

江戸紫では、同じツバキ科のヒサカキを使う。紫染めが、いまでも民芸として残っている南部紫では、使う灰はニシコリという樹、つまりハイノキ科のサワフタギのものを使う。

同じムラサキで染めるのだが、地方によってそれぞれ媒染剤の樹が違っている。これらの樹は、いずれもアルミニウムを含んでいる。

ムラサキの根には、シコニンという色素がふくまれていて、これがアルミニウムの金属原子と結びつくと、美しい紫に発色し、繊維のなかに定着する。これが紫染めの化学なのである。

紀元前七世紀、春秋時代の斉の桓公は、紫服を好んだので一国ことごとく紫服になったと、『韓非

子』にある。古代中国では、蒼・赤・黄・白・黒の五つを正色とし、紫は不正の中間色であったが、このころから紫が貴い色とされるようになった。

日本でも、推古朝の十一年（六〇三）、冠位制が定められ、六色により貴賤が分けられたが、その最高色位は紫であった。紫へのあこがれは、王朝時代にもつがれ、『源氏物語』のヒロインには、紫の上の名があてられているし、『枕草子』にも「なにもなにも、むらさきなるものはめでたくこそあれ」といわれている。

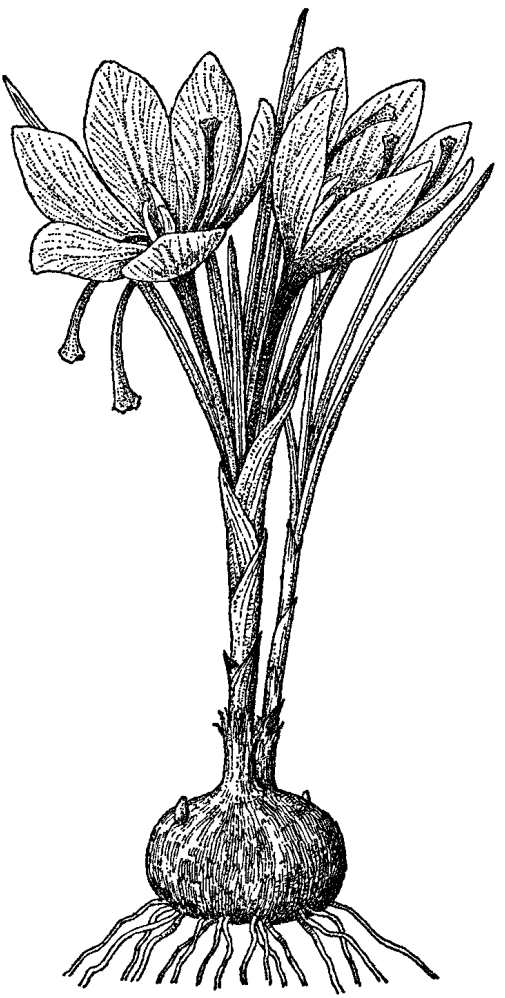
かつて武蔵野の名草であったムラサキは、ススキ草原に生えるムラサキ科の野草だが、野生のものはほとんど消えてしまった。高尾山周辺の山道で、稀に咲いていることがある。小さい白の合弁花は、目立たない地味な草だ。

花姿のよく似ているセイヨウムラサキは、ヨーロッパ産で昔から薬用にされているが、根には紫の色素がなく、染色には使われない。

ヨーロッパの王が好んだ帝王紫、シーザーの着た紫の衣、クレオパトラの船の紫の帆などは、植物染料でなく、貝紫という巻貝の色素であった。

それにしても、紫という色は、古今を通じ東西にわたって、人の心をひきつけた神秘の色であった。

サフランと平賀源内



サフランという花の名には、なにかエキゾチックな響きがある。だから、若い日の白秋も、これをうたった。詩集『思ひ出』に、「泊芙藍」の一編がある。その一節に――

罅入りし珈琲碗に／泊芙藍のくさを植ゑたり。

その花ひとつひらけば、／あはれや、呼吸のをののく。

サフランは、ヨーロッパ南部の原産。はるかに海を渡ってきた異邦の花である。

江戸時代の奇才、平賀源内もまた、この花について述べている。彼が、全国から珍奇の産物を集めて開催した、いまでいうなら博覧会のはしりがあった。その出品物について、最新該博の知識をもって解説したのが、『物類品隲』（宝暦十二年・一七六二）という本だ。当時、彼は鎖国の海を越えてくる異国趣味に酔っていたようだ。

「泊芙藍　ラテイン語サフラン。紅毛語フロウリスエンタアリス、又コロウクスヲリエンタアリト云。此ノ物生草絶テナシ。乾花蛮国ヨリ来ル。東壁曰ク。番紅花は西番・回回ノ地面及ヒ天方国ニ出ヅ。……」

そのころ日本では、サフランはまだ栽培されていなかった。西番は、西域の諸国、回回はペルシア地方、天上国はアラビアをさす。この地方から中国に入り、漢方薬として日本へ入ったものだ。番紅花は、泊芙藍の一名である。生のままのサフランが渡来したのは、文久四年（一八六四）で、日本で栽培がはじまるのは明治十八年（一八八五）になってからだ。

サフランは、アヤメ科の多年草。学名では、クロクス・サティヴァ。古代ローマでも、クロクスといわれたが、古代ギリシア語のクロケ（糸）に由来している。糸のような雌しべのことだ。サフランともいうのは、黄色をあらわすアラビア語のザフランからきた。黄色染料として使われたからだ。

乾燥サフランを作るには雌しべの先の赤黄色の柱頭という部分だけをつみとるので、一ポンド（四五四グラム）の乾燥サフランのために七万五〇〇〇輪の花が必要といわれる。たいへん高価な物産であった。

この部分には、黄色色素のクロレン、苦味のある配糖体のピクロクロシン、芳香性物質のサフラナールなどが含まれているので、染料、香味料、また鎮痛・鎮静・通経・健胃などの医薬として、昔から使われてきた。

紀元前一五〇〇年ごろの、クレタ島の遺跡の壁画にサフランの柱頭を採取する図があるから、古代から栽培されていた。同じころのエジプトの薬典にも、のっている。

古代ギリシア人は、この花で染めた色をサフラン色といい、貴重なものとした。

ギリシアの詩人ホメロスの『イリアス』では、「曙（あけぼの）がいまサフラン色の衣を着けて、地の上をくまなくさし照らせば」とうたっている。曙の神エオスは、いつもサフラン色の衣をまとい、二頭の馬にひかれた戦車に乗って、太陽神ヘリオスに先だって天空をかけると信じられていた。

ローマのプリニイの『博物誌』には、サフランについて多くの記述がある。例えば、サフランから

二十種の薬がとれるとし、「サフランは、ブドウ酒や水とよく混り、医薬品としてたいへん有用で、すべての炎症を散らす、ことに卵といっしょに内服すると、眼の炎症によい。また湿疹をなおし、排尿をすすめる。はじめにサフランを飲んでおくとブドウ酒の二日酔いをしないし、それで作った花輪をつけていれば酔いが緩和される」という。香料としては、甘口ブドウ酒にまぜて、劇場に散布した。

皇帝ネロは、彼の行列の道すじにサフランをまかせ、芳香を楽しんだし、皇帝エラガバルスは、サフラン入りの風呂を好んだ。

サフランの、神秘的な色と匂いと味とは、世界の人々の心をうばった。シェークスピアの作品のなかにも、サフランはしばしば登場する。そして、元の時代には中国に入り、サフラン入りのヒツジ料理〝八兒不湯(バルブタン)〟のような強壮滋養食がつくられた。マルセイユ料理のブイアベースは、地中海の幸に、サフラン、ゲッケイジュ、マヨナラなどの香りを加えたものだ。マルセイユは、古代ギリシアのイオニア人のつくった植民都市。

サフランの花言葉はイギリスでは「歓喜」という。またフランスでは、「歓喜の度を過ごすな」とある。人間の機微を知っていたサフランの花であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com